

道徳性の芽生えを培う保育環境のあり方について

－ A 幼稚園の異年齢保育の実践から －

澤 ひとみ*

A childcare environment that cultivates moral seedlings

－ A childcare practice of various ages at kindergarten －

Hitomi Sawa

【キーワード】 異年齢保育, 道徳性の芽生え, 他者理解, 群れ遊び
Childcare of diverse age, Moral seedlings, Understanding others,
Flock play

はじめに

少子化、核家族化など、幼児を取り巻く社会の変化により、幼児の対人関係が乏しくなっている。また、お年寄りや大人から当たり前のようを受け継がれてきた社会的規範（道徳的な意識）が、核家族化や個性を重視した教育の中で、自己中心的な身勝手な価値観となっているように見受けられることも多い。幼稚園は幼児にとって初めて出会う集団であり、社会である。初めての集団生活の中で、幼児は周りの人々からあるがままの自分を受け止められていることで安心感をもち、それが基盤となって活動の場を広げていく。その中で、みんなと一緒に遊ぶと楽しい・おもしろい・嬉しい・くやしいなど多様な感情体験を積み重ね、自分の思うようにならない現実があることにも気づいていく。

幼稚園ではこれら全体を踏まえて、好ましい道徳的な判断や、善悪に対する好悪の感情の基盤となる道徳性の芽生えが培われるよう、繰り返し丁寧に指導していく必要がある。どのような環境が必要なのか、再度保育の見直しを図るとともに、周りの大人がどのように立ち振る舞うべきなのか、教師や保護者の意識改革も必要である。

所属および連絡先

* 堺市立みはら大地幼稚園・大阪千代田短期大学（4月就任予定）

1. 研究の目的と方法

道徳性の芽生えを培う保育環境のあり方とは、物的環境としてだけではなく、人的環境となる教師や保護者の姿勢、幼稚園全体としての意図的・計画的な指導などを包括した教育課程の編成も含まれる。本稿では、A幼稚園の異年齢保育の実践を通して、幼児の道徳性の芽生えを培うための幼児理解に基づいた教育的視点を提案し、各幼児教育施設における教育課程編成の一助となることを目的とした。

A幼稚園では、道徳性の芽生えを培うための視点として「他者理解」について学び、幼児を取り巻く環境の中に薄れてしまった「子どもの社会＝群れ」を再現することが必要であると考え、3歳・4歳・5歳混合の異年齢クラス編成での保育を取り入れ、12年間継続している。A幼稚園が異年齢保育を取り入れるにあたってどのように考え教育課程の中に位置づけてきたのか、試行錯誤しながら積み重ねてきた実践の中での気づきなどを振り返り、道徳性の芽生えを培う保育環境としての異年齢保育の意義について考察する。考察を進めるにあたり、A幼稚園がキーワードとした「他者理解」と異年齢保育の中に求めた「子どもの社会＝群れ」についてふれる。

1) 幼児期における道徳性の芽生え

幼児期における道徳性の芽生えについて、平成29年3月告示された幼稚園教育要領（文部科学省2017：14）には「道徳性の芽生えを培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、幼児が他の幼児との関わりの中で他人の存在に気づき、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまずきをも体験し、それらを乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること」と示されている。A幼稚園では、特に「他人の存在に気づき、相手を尊重する気持ちをもって行動できる」幼児の育成のため「他者理解」をキーワードとした。

2) 幼児期の道徳性の発達と他者理解

A幼稚園が「他者理解」をキーワードとしたもう一つの側面として、道徳性の発達を踏まえている点があげられる。『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』に、「道徳性の発達は、乳幼児期から培われている他者への興味・関心や他者に合わせようとする基本的な信頼関係に始まり、やがて他者への共感性を豊かにしながら、自分とは違う他者を意識するようになり、自他両方の視点を考えて、自分の欲求や行動などを調整できるようになる過程を経て、達成されていくといえる（文部科学省2001：4-5）」とあるように、幼児期の道徳性の発達が他者との関係性の中で育っていくことを示している。

3) 「群れ遊び」を再現する意味

2012年、文部科学省が策定した幼児期運動指針では、「幼児期には徐々に多くの友達と群れて遊ぶことができるようになっていく。その中でルールを守り、自己を抑制し、コミュニケーションを取り合いながら、協調する社会性を養うことができる（文部科学省2012）」とあり、幼児が群れ遊びの中で様々な体験とともに社会性が養われていくことを示している。しかし、ベネッセ教育総合研究所が発表した「第5回 幼児の生活アンケート」では、『幼稚園・保育園以外で「友だち」と遊ぶ幼児、20年間で56%から27%へ半減（ベネッセ教育総合研究所2015）』したとされる調査結果が示されている。少子化などの社会環境の変化により、地域の広場や公園で異年齢の幼児が群れて遊ぶ姿が年々減少し、幼児を取り巻く社会環境の変化は、幼児が社会性を学ぶ場や機会を確実に減少させている。このような現状から、幼稚園にあえて「子どもの社会＝群れ」を再現することが、幼児の道徳性の芽生えを培うために大きな意味があると考えられる。

2. 実践内容

1) A幼稚園について

園内外の恵まれた自然環境を活かし、自然との直接体験を中心にした教育内容を展開している。平成5年に開園し、3歳児6クラス、4歳児4クラス、5歳児5クラスの3年保育を実施している。園区の南端に位置しているため園児のほとんどが園バスを利用して通園しており、園庭開放も実施できないため、降園後は保護者間のつながりのある特定の友達か、保護者やきょうだいのみの関係で遊ぶという幼児も多い。

また、開園よりほぼ3年ごとに公開保育を行うことで、教育内容の深化・充実と教師の資質向上をめざし研究活動に取り組んでいる。本稿で取扱う実践の直近では、「人とふれあい、共感しあう体験を豊かに～発達の諸側面と教育課程の関連について～」をテーマに文部科学省の研究指定校として研究に取り組み、人間関係の領域を主軸にした教育課程を再編成している。

2) 異年齢保育に取り組むまで ～道徳教育研究からの経過～

平成16年度の園内研究テーマは、「道徳性の芽生えを培うための援助のあり方について」であった。道徳性に関すると思われる幼児の姿に関して担任や保護者によるアンケートを実施し幼児の実態を把握すると同時に、教師の援助のあり方や教材研究を深め、その過程で、道徳性の芽生えを培うための視点の一つとして「他者理解」というキーワードを得た。他者の立場に立って物事を捉えられる幼児の育成をめざして、多様な人間関係の場に身を置く体験を保障するための手立てとして異年齢保育に取り組むことになった。

3) 異年齢保育を始めるにあたって

これまでも異年齢で交流する機会を設けていたが、時間が短すぎたり、単発的なかわりになってしまふことが課題であった。また、前述のように近所に遊ぶ友達がいない地区もあり、日常的に異年齢で交流する機会が少ない幼児も多い。そこで、より深く豊かなかわりを期待して、園での生活を一日中ともに過ごす、「生活クラス」として異年齢クラスを設定した。

《生活クラス（異年齢）》では、日々の生活を充実させることを基本にした生活計画・環境づくりを行い、《基礎クラス（同年齢）》では、各年齢に応じた発達を保障するための基礎を積み上げるような指導計画をもって進めることとした（表1、表2）。クラス編成においては、①同じバス停留所の幼児は全て同じクラスにする②きょうだいも全て同じクラスにする③3・4・5歳児の人数のバランスを考えて編成することに留意した。

表1 クラス編成の年間計画

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
ク ラ ス	生活(異年齢) クラス	※2	基礎(同年齢)クラス						生 活 ク ラ ス	基礎クラス			
	※1												

※1 4・5歳児は、年間活動計画に基づき学年ごとに集合し活動する時間もある。各グループの学年担当教員が学年ごとにグループの幼児を指導する。

※2 5月中は週2日（火・金）3歳児のみ午前保育（身体的疲労を考慮）。その日の午後、4・5歳児は基礎（同年齢）クラスで活動する。

表2 生活・基礎クラスで行う主な活動

生活(異年齢)クラス	基礎(同年齢)クラス
生活習慣に関する指導（身辺整理、トイレの使い方など）・健康診断・身体測定など	栽培活動・絵画制作活動・プール遊び・劇遊び・音楽遊び（合奏等）・幼小交流活動など
自発活動（遊び）・歌・絵本・リズム運動・各種行事等	

※ 特徴的なものを列挙。固定化させたものではなく、幼児の状況に応じてそれぞれのクラスで活動したり、相互に関連性をもたせて運営。

「他者理解」を深めるための保育のねらいとして、①互いにかかわりながら、それぞれの違いや良さに気付く、②共に生活することを心地よいものと感じ、自ら求めてかかわっていく、の2点を念頭におき取り組み始めた。体制としては保育室の配置等を考慮して15クラスを4つのグループに分け、各グループともに全学年の担任をバランスよく配置することで、《基礎クラス（同年齢）》との連携を保ち、幼児の状況に応じて、《生活クラス（異年齢）》《基礎クラス（同年齢）》で過ごす時期や時間を柔軟に変化させた（表3）。

表3 クラス編成とグループ担任構成について

【生活（異年齢）クラス】
（4月・5月・11月）

	グループ	組	異年齢 クラス担任
3	A	1組	5歳担任
		2組	3歳担任
		3組	4歳担任
		4組	3歳担任
4	B	5組	5歳担任
		6組	4歳担任
		7組	3歳担任
5	C	8組	4歳担任
		9組	3歳担任
		10組	5歳担任
歳 混 合	D	11組	3歳担任
		12組	5歳担任
		13組	4歳担任
		14組	3歳担任
		15組	5歳担任

【基礎（同年齢）クラス】
（6月～10月・12月～3月）

学 年	クラス数
3歳児	6クラス
4歳児	4クラス
5歳児	5クラス
合 計	15クラス

※異年齢保育・同年齢保育の連携強化を含め、
下記の職員会議を設置

- ①全体会議
- ②主任会議（園長・准園長・各学年主任（グループ長））
- ③学年会議（学年主任・担任）
- ④異年齢会議（グループ長・担任）
- ⑤特別支援会議
- ⑥その他

4) 異年齢保育の実際

(1) 1年目の取組

①事例1 「相手を知る」

1年目の春、異年齢クラスで過ごし始めた頃、5歳児のA児は、同年齢の友達とブロックで遊んでいた。夢中になって遊んでいる間に、集めておいていたブロックを3歳児のB児が持って行ってしまふ。しばらくして気付いたA児は怒り児に「ぼくらが使ってるから、勝手にとるな」と詰め寄る。B児は「いや」と言って離さず取り合いになってしまう。教師は、5歳児の遊びの様子を遠くから見ていたB児の姿から「B児も同じように遊びたかったのと違うかな」と伝える。B児の気持ちを知ったA児は「今度から貸してって言ってや」とブロックをB児に差し出す。B児はお兄ちゃんたちを真似て楽しそうに遊びだした。

A. 事例の捉えと考察

5歳児のこの時期には、3歳児のこうした行動を理解できず、対等に喧嘩したり怒ったりすることもしばしばある。年齢の違う幼児が生活するからこそぶつかり合いも起こり、自分の思うようにはいかない葛藤など、多様なかわりの場に出会う。その中で幼児はいろいろな相手を知り、その気持ちに気付いていく。

②1年目の実践の振り返り

A. 幼児の姿から

3歳児は、登園時のバス停から降園まで、年長児と一緒に遊び、生活することができる。親から顔見知りの年長児へと安心できる存在が引き続いてあることが、入園当初の不安を軽減し、安定感をもたらした。4歳児は、身辺整理など自分でできる力は育っているが、新しい環境への不安もある。同じ保育室で5歳児が当たり前に行動している様子を目の前にして、見よう見まねで慣れていくことができる。5歳児は、最年長児として進んで年少児の世話をする姿が多く見られた。3歳児の保護者や担任から「5歳児さん、お願いね」と頼られることが誇らしい様子であった。しかし、事例1のように、相手の行動を理解することができずトラブルになってしまうことも多くあった。その都度教師が仲介をしたり、状況を説明することで少しずつ相手と自分の気持ちの違いに気付く姿も見られた。

B. 教師の気付きと課題

3歳児の安定感に驚かされ、様々な場面で異年齢児のかかわりを見ることができ、異年齢で生活を共に過ごすことの良さを認識することができた。また、3学年を同時に受け持つことによって、各年齢の発達の違いや援助の難しさに出会い、教師間での情報交流や学びあいが活発になった。しかし、年少児の世話をすることに終始しすぎているのではないかと、各年齢に応じた対応ができているのか、各年齢の発達の課題をどのように保障していくのかという課題も見いだされた。

C. 保護者の受け止め

3歳児の保護者は、初めての集団生活に慣れていく様子を見ることで異年齢で過ごすことの良さを感じ肯定的に受け止めていた。降園後の地域でのかかわりが活発になっていく良さがある反面、始終一緒では疲れるといった保護者同士のかかわりの不具合を訴える地域もあった。5歳児の保護者の中には、5歳児としての発達は保障されるのかと不安をもつ保護者もいた。

③ 1年目の実践の中から見えてきたこと

《生活クラス（異年齢）》の良さとして、①相手を知る機会に恵まれ、様々な感情体験が生まれる、②生活全てを共に過ごす中で、見よう見まねで学んでいく様子が見られた、③関係が深まるとともに、相手を思う気持ちの芽生えが見られた。

④ 次年度への課題

5歳児が年少児の世話をすることに終始しすぎているのではないかと、生き生きと遊び、生活する5歳児の姿こそが大切なのではないかと反省し、いずれの年齢の幼児においても自分自身が充実できるような生活を送ることができるように取り組んでいくことを2年目の課題とした。きょうだい関係については安心・安定の度合いが高い反面、2人きりの関係が強く、他の幼児とのかかわりが広がらない、きょうだいゆえに甘えすぎる、甘えられすぎることが精神的に負担になる様子が見えた事例があったので、2年次には4歳児については別クラスにすることも

検討した。また、配慮が必要な幼児については、異年齢でも同年齢でも担任を変えず、ゆっくりと関係を築いていくことが優先ではないかと考えた、担任の配置に配慮した。

(2) 2年目の取組

①事例2 「思いやりの行動」

入園して初めての検診（内科）の日、不安から泣き出しそうな3歳児も多い。5歳児のC児は3歳児のD児の手をしっかりとつないで「大丈夫やで、ちょんちょんするだけや。お兄ちゃんの見ときや」と並んで検診を待つ。検診中も怖がっているD児の手をやさしく握り言葉をかけるC児。いつしかD児の不安も解消され無事終了する。その後の着衣を見守るC児に、やり終えることができ嬉しそうなD児が笑顔を見せる。

A. 事例の捉えと考察

怖さや不安からぎゅっとつなぎ返してくる3歳児の手をしっかりと握ってさすったり、目線を合わせてやさしく語りかけたりする5歳児の姿が見られた。「小さな子が不安がっているから、ぼくがしっかりとなくっちゃ」「どうしてあげたらいいのかな」と懸命に考えてかかわっている姿が微笑ましい。相手の気持ちを感じ取り、寄り添う姿に成長を感じる場面である。

②2年目の実践の振り返り

A. 幼児の姿から

1年目の反省から、「存分に遊ぶ～それぞれが自己充実・自己発揮できる生活～」を念頭に置き2年目の取組が始まった。異年齢クラス2年目を迎える4歳児・5歳児は、進級当初から伸び伸びと生活する姿が見られた。「あれもしたい」「これもしたい」と進級の喜びを体いっぱい表現し、戸外で活発に遊ぶ姿で園中が活気づき、その醸し出す雰囲気「遊ぶ楽しさ」を伝え、広がっていった。すると、伸び伸びと遊ぶ幼児達が自然にいくつかの「群れ」をなしている様子が見えてきた。「群れて遊ぶ」幼児、喧嘩もあれば、置いてきぼりもある。それでもまた「群れて」いる。幼児達の表情は喜怒哀楽に富み、豊かな感情体験が生まれていた。

3歳児の身辺整理については、4・5歳児が過剰に世話をやくのではなく、困っていたら手を貸すといった、つかず離れずの自然な援助が見え始めた。前年度、自分がしてもらった経験が自然なかかわりに表れているのではないかと見て取った。

B. 教師の気づきと課題

一人一人が充実した生活を送ることによって、相互により刺激を受け合い生活や遊びが発展していくことを確認できた。特に遊びの場面で見られる自然発生的な「群れ」の出現から、「群れることの意味」や「群れて遊ぶ中で培われる力」に気付くことができた。

C. 保護者の受け止め

前年度、様々な機会を利用して、幼児の実態とともに異年齢保育の良さや伝えてきたことと、近所の5歳児や我が子の成長ぶりを実感したこともあり異年齢保育への理解が深まっていった。

③ 2年目の実践の中から見えてきたこと

2年間、異年齢で生活する《生活クラス》と同年齢で様々な活動を通して基礎的な力を身につけていく《基礎クラス》を意図的・計画的にカリキュラムに位置付けてきた中で、どちらの園生活も幼児の成長・発達に必要なものであり、この両輪があってこそ豊かに多面的に育てることができると実感した。

④ 次年度への課題

地域社会の中に群れて遊ぶ機会が少なくなった今、3・4・5歳児が集う幼稚園でこそその再現が可能であり、この取組がきっかけとなり地域に帰った幼児達が「群れて楽しむ遊び」とともに「人とかかわる豊かさ」を地域に持ち込んでくれることが期待できる。そのためには、群れ遊びや伝承遊びの教材研究や実践を重ね、その中で教師の援助のあり方を探りながら、今後も異年齢の群れの再現を継続発展させていく必要がある。

5) 継続した取組へ ～異年齢保育を教育課程に位置づける～

前述のように取り組み始めてから12年経過している。この間、活動内容やクラス編成、異年齢保育時期の改善を重ねながら取組は継続し、A幼稚園の特色ある教育課程として、保護者にも地域にも理解を得ている。今回、取組の始まりから振り返ってきたが、決して古い実践ではなくむしろ継続した取組として価値ある実践であると考えている。12年にわたる実践から、道徳性の芽生えを培う保育環境として異年齢保育を取り入れる意義と効果について次のように考察する。

3. 考 察

幼稚園教育は、「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本（文部科学省2017：3）」としている。人とかかわる力を育むために再構成した「異年齢保育」という環境は、より多様な人間関係を生み出すことにつながっていると思われる。幼児を取り巻く環境について計画性をもって意図的に再構築していくことで、幼児がその環境から主体的に学びとっていく姿を確認することができた。

1) 異年齢保育の中で育つもの

(1) 見て、真似て、自ら学ぶ意欲 ～園生活のモデルが身近にいる安心感～

3歳児・4歳児にとって、入園・進級当初は、新しい環境の中で身辺整理など新しいことへの不安がある。身近なモデルが毎日そばにいて、生活するさまや遊ぶさまを目にすることができる異年齢の生活では、年少児は年長児をまねて、生活に必要なことを学んでいくことができる。最年長児となった期待と喜びを感じる5歳児にとっても、同じ地域の3歳児の保護者から

「お兄ちゃん、〇〇のことをお願いね」と頼られることは大変嬉しく、自分自身の成長を感じ自己有能感の高揚につながる。

5歳児が3・4歳児から学ぶ姿もある。周囲の状況が理解できるようになった5歳児だからこそ生まれる羞恥心や失敗したくないと躊躇してしまう心情がある。3歳児の楽観的な行動、素直な表現に出会うことは、5歳児に自由感をもたらし、挑戦してみようという前向きな行動につながる。4歳児は、その両方の学びの機会を得て安定した生活と活動的な遊びを展開することができる。

(2) 違いに気づき、受け入れ、対応する力 ～多様な人間関係と感情体験～

年齢の違う幼児の集団では、相手の行動に対してどのように対応すればよいのか戸惑うことも多い。しかし、そういった日々の体験の中で様々な姿に出会い、自分との違いを感じ、それを受け入れ、工夫して接する姿が多く見られるようになる。教師の仲介などを得て、自分を律し譲る姿、相手の状況を考え気持ちを思い計り自分の行動を調整する姿、通じ合い理解し合えた喜びを感じる姿、人の役に立つ喜びを感じている姿など、自らの体験に加え、このような周囲で目にする姿の中から学びとることができる。

(3) 個々の発達と興味に応じた体験の保障 ～最近接領域のかかわり～

幼児期は月齢の違いなどによる発達の個人差が大きい。同年齢集団の活動では、物足りなさを感じる幼児や、同じように活動することが困難な幼児もいるが、異年齢保育では、3学年が共に過ごすことで個々の発達の状況に応じてかかわる幼児や遊びを見つけることが保障されやすくなる。各学年の月齢が高い幼児は一学年上の幼児集団に入って遊んでいたりと、月齢の低い幼児は一学年下の幼児とかかわり、教えたり手伝ったりすることを喜ぶ姿が多く見られる。特別な配慮が必要な幼児にとっても同様に過ごしやすい環境となっていると思われる。

2) 異年齢保育と同年齢保育の良さをいかしたカリキュラム

(1) 2つのクラス・2人の先生 ～2つのクラスをもつ良さ～

A幼稚園の特色あるカリキュラムで幼児は、異年齢クラスと同年齢クラスの担任・友達と出会うことになるので、多くの「知っている人」が増える。また「〇〇ちゃんだ、おはよう」と声をかけてくれる人も2クラス分になるので、より多くの人から声がかかり、「また、あそぼうね」と手を振って呼びかけたい人も増え、人とかかわりが豊かに広がっていく。多くの人と出会い、様々な感情を体験する幼児は、それぞれの違いや良さに気づき、受け入れたり、思いやりたりできるような機会も増えていく。そのような園生活の中で、人と共に生活することを心地よいものと感じ、自ら求めてかかわっていく幼児へと成長していくことができる。

(2) 各年齢に応じた発達を保障する ～仲間と一緒に乗り越えていく達成感～

各年齢に応じて、身につけておきたい基礎的な力がある。もちろん異年齢クラスの生活の中

でも養われていくが、同年齢集団の方が取り組みやすい活動内容も多くある。同年齢クラスでは、各年齢の発達を保障するための取組や活動を中心に仲間とやりとげた達成感を味わい、明確なめあてをもって取り組むことで自己有能感を高めることができる。異年齢保育の良さと同年齢保育の良さを明確に捉え、カリキュラムに計画的に位置づけることで、一人一人の育ちを確かなものにつなげることができる。

(3) 降園後も遊びが続く ～地域社会への寄与～

異年齢クラスは地区を基本に編成しているので、降園後も近所の友達と遊ぶ関係が続いているようであった。やはり、よく遊んでいる地域の幼児は、園でも集団性が高いように見受けられた。この異年齢保育をきっかけに地域でも群れて遊ぶ姿が再現されることで、幼児にとって多様なかわりの機会を広げることになるとともに、保護者も巻き込んで地域をつなげる効果を生み出すことにつながっている。

3) 群れ遊びの中で培われる道徳性の芽生え

A幼稚園では、2年目の実践で自然発生的な「群れ」の出現に着目し、群れることの意味や群れて遊ぶ中で培われる力について研究を深めている。幼児の群れ遊びの観察や教師から提示した伝統的な群れ遊び（わらべうた遊び、鬼ごっこなど）の実践から、群れ遊びの魅力を次のようにまとめている。①いつでも、どこでも、誰とでも一緒に遊ぶことができる開放感、②楽しいと感じるところがそれぞれに違っていても遊ぶことができ、どの子にも機会があるという期待感、③力を感じる接触や相手の動き、息遣いを感じ取りながら動くおもしろさ、④あそびうたや動作の繰り返しなど、見通しがもちやすく安心して遊ぶことができる、⑤毎日楽しめる。飽きることなく、変化させていくことが可能である。以上のような群れ遊びの魅力は、幼児を夢中にさせ、繰り返し体験することにつながる。群れて遊ぶことで幼児は他者の存在を意識したり、自分の行動を調整したりするなど、道徳性の芽生えも培われていくのである。

群れ遊びの魅力を教師間で共有し保育の中に取り入れることは、人とかわる力を豊かに育てていきたいという当初のねらいを達成するための具体的な手立ての一つとなった。

おわりに

道徳性の芽生えを培う保育環境のあり方について、A幼稚園の実践から以上のように考察した。幼児にとって適切な保育環境を整えると同時に、その保育環境が最大限に活かされるために、以下の2点も重要な視点として付け加えておきたい。

第1点は、人的環境としての教師のあり方である。教育課程や保育環境を整えても、幼児に直接かわる教師の態度や振る舞いが人間性を欠くものであれば保育環境として成り立たな

い。『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』では、「幼児は教師の指導によってだけではなく、教師の態度や行動からも社会的な価値観を学んでいる。それゆえ、幼児に道徳性の芽生えを培おうとするなら、教師自身が身をもって態度や行動に道徳性を表していることが大切なのである（文部科学省 2001：36）」と述べられている。教師自身が研修を重ねることで、幼児理解を深め、一人一人の成長に寄り添った働きかけができるよう努めなければならない。また、教師自身も集団である。同僚性をもって研鑽に努める教師集団であることが重要であり、そのような集団を育てるリーダーシップ力が園長等の管理職に求められている。

第2点は、各園の実態に応じたカリキュラムマネジメントの重要性である。幼稚園教育要領前文に「各幼稚園がその特色を生かして創意工夫を重ね、長年にわたり積み重ねてきた教育実践や学術研究の蓄積を生かしながら、幼児や地域の現状や課題を捉え、家庭や地域社会と協力して、幼稚園教育要領を踏まえた教育活動の更なる充実を図っていくことも重要である（文部科学省 2017：2）」と示されている。A児幼稚園の取組は、幼児や地域の現状や課題を捉え試行錯誤しながら積み重ね、教育課程を再編成してきた実践である。これは、今回の幼稚園教育要領の改訂において重要なポイントの一つとされるカリキュラムマネジメントであり、課題解決のために教育課程を大胆に再編成し、「教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とともに共有される（文部科学省 2017：6）」よう努めてきたことは、地域に開かれた教育課程として地域の教育力向上に寄与してきたのではないかと考える。

<引用文献>

文部科学省（2017）『幼稚園教育要領』（<http://www.mext.go.jp>, 2018.2.2）

文部科学省（2001）『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』ひかりのくに株式会社

文部科学省（2012）『幼児期運動指針』

ベネッセ教育総合研究所『第5回 幼児の生活アンケート プレスリリース』（<http://berd.benesse.jp>, 2018.2.2）